

## コメント

朴 裕河

○朴 こんにちは。皆さんの大変刺激なお話をちゃんと聞けたかどうか自信がありませんが、ほかの帝国の場合や戦争をした国々の場合と比較してはじめて見えてくるものがやっぱりあると考えてもいたので、いろいろと勉強になりました。ありがとうございました。

順番に、それぞれのご発表を聞きながら考えたことに簡単に触れてみたいと思います。

まず、浅野先生ですが、反戦と反支配という、私の問題提起に対して、反支配という感覚あるいは問題提起がこれまで少なかったのはアメリカとの関係があるのではないかというご指摘をいただき、なるほどと思いました。私はこれまで心理的なものとして考えてきていて、ある意味で対等な、戦争体験を経た国家関係と、支配＝被支配の関係にあった国同士の心理の違いを見たいと思っていました。帰ってきた引揚者はもちろんのこと、その子供たちにまで何らかの抑圧・影響を及ぼすという話が、きのうもありましたが、振り返りたくないという気持ちがあり大きいという気もするんですね。ですから、そういった心理的なものと、浅野先生が指摘してくださった、政治的な背景——これらは日常と結びつくことになるとも思いますが——そういうことをもっと考えてみたいと思いました。特に、最後に触れられた実証主義的分析と大きな歴史の枠組みへの挑戦というのは、最近浅野さんといろいろと話し合っていることでもありまして、そのとおりと納得しつつ伺っておりました。きのうは文学、きょうは社会学や文化研究など、いろんな分野の方がいらっしゃるのですが——それぞれの分野から何をやるのか、あるいは何ができないのかといった話も出ていましたが——実証主義というものが優位に置かれてきた近代という時代あってのことかもしれないとも改めて思いました。近代とはどういう時代だったのかを考え直すことで、それぞれの場でおっしゃったことが一つの構造として見えてくるのかもしれないとも考えました。

次に、佐藤さんのご発表についてですが、やっぱりこのお二人の話を聞いても、社会学からの指摘と文学からの指摘がそれぞれ異なっている。ですから、一つのテーマを考えるに際して、学際的研究をとおしてそれぞれの場では見えてこないものを埋めていく作業が本当に大切だと改めて思った次第です。ドイツは謝罪をし、日本は謝罪していないというような枠組みが韓国では一般的な認識になっています。日本の場合、今でもいろんなことが「問題」として指摘されているわけですが、そうした現実がそういう認識を作っているとも思いました。ドイツの場合、実際したかしなかったかは別に、謝罪をしたという自己認識が実際の振る舞いに影響を与えているのかもしれないと思われました。

何かを語ったつもりで別のことが語られる、あるいはまったく語れないというようなこともおそらくあると思うので、もしその辺のことで何かあれば教えていただきたいと思います。

それから、文学に関しての永畑さんの発表で、移住者というタイトルになっているということがおもしろいと思いました。今の感覚だとみんな「難民」と言うと思いますが、難民という

言葉、ドイツ語にはありますか。

○佐藤 そもそもは、被追放者、ドイツ語で Heimatvertriebener というんですけれども、最初のころは Flüchtlinge という今の難民と同じように言われていたんです。だからいろいろな言い方が混在していて、今でも Flüchtlinge というふうに言う人が結構いるんですよ。だからその辺ちょっと言葉が混同しています。だからシリアの難民も Flüchtlinge ですし、ドイツ人の追放された人も Flüchtlinge と呼ばれていたこともあるし、今でも呼ぶ人がいます。ただ、Heimatvertriebener というふうに言うと、もうドイツ人だけです。だからこれはちょっとどうしてこういう言葉の使われ方になったのか、ちょっと僕も謎なんですけれども。

○朴 言葉はやっぱり大切、と思うのは、言葉自体にそれを眺める人々の視点が入っているからです。難民というと最初から被害者との認識が入っているわけですが、移住者というと自発的意思が入っているかのように聞こえる。そういう意味では、単語にも同時代の認識を見ることが出来ます。

移住者なり引揚者の物語が国民の物語になるかならないかは、語りの内容によって決まるのかもしれませんが。名称や、政治的責任を国家がとったとかそうでないかなど、様々な要素が国民物語の成立に違いをきたすのではないのでしょうか。

佐藤さんの、「故郷権」があったという話にも、なるほどと頷かされました。そういう単語が作られる背景や心理をもっと知りたいですね。本来ならば当たり前の権利であるはずですから。同時に、故郷という言葉自体がイデオロギー含みというか、「故郷」なる認識がつくり出されたりして故郷への気持ちがナショナリズムをつくったり利用されたりすることももちろんあるわけで、その両方の働きをともに見るべきでしょう。ですから、どちらをとるかによって肯定的にも否定的にも受け止められるとは思いますが、いずれにしても、日本の場合だけを考えると気づかないことで、大変興味深いことを教えていただきました。

さらに、なぜドイツではそういう言葉が存在し、結果として国民物語への志向性に違いをもたらしたのか、ということをもっと突き詰めて考えることも必要でしょうね。今日世界が認めているドイツの謝罪というのは、必ずしも言われているのと同じではないという指摘も出ていますが、過去をめぐる謝罪の問題と引揚げ・移住の問題をつなげて考えてみると問題が深まる気がします。

西先生は、朝鮮半島は過去の記憶を消している、ポーランドとは違うという話をされました。例えば韓国の林志弦さんなど、そうしたポーランドの歴史をわかっているポーランド研究者が、こういう物語、あるいは日本の事情を知ることに対してはある種の警戒をしてしまうようです。つまりナショナリズム批判もしているし、その他いろんなテーマについて深く考えている研究者たちが、日本とかかわる問題に対しては必ずしもそうした認識を生かさない。つまり普遍的な認識にしない、代わりにちょっと構えてしまう理由はどこにあるのだろうか。そうしたことをちょっと考えましたので、その辺に関して西先生にご教示いただけたらいただきたいです。

それから、「クレスイー」という、境界の話もとてもおもしろかったです。私が『引揚げ文学論序説』に取り上げた人たちもいわば戦後日本におけるマイノリティーです。「文学」が、多くの場合マイノリティー的な視点・位置から生まれてくるのはよくあることですが、やっぱり

領土的な位置関係から見ても、周辺部に追いやられた人たちがいて、いわばマイノリティ化されることがおきる。つまり、帝国主義や植民地支配というのは、それまで中心部にいたはずの人々が、帝国者がやってくることによって周辺化されることです。韓国の例でいえば、もとは何もなかった地域に裁判所や警察署や銀行や学校が作られることで、そこが新しい町となって中心部になっていく。いわば<文明化>によってももとの中心地が周辺部になるというのはよくあることです。そのときに原住民たちが感じただろう疎外感や実際の経済的な不利益、つまりマジョリティーからマイノリティーになっていく現場を見た人たちがそうしたことを書くわけですね。植民地と元帝国の当事者たちを比べるときは、そういったことをどこまで見ているのかなどが評価の一つの基準になるのではないかと思います。きのうの原さんの言葉で言えば無頓着なものを書いてしまったりするような人ももちろんいるわけで、やはり、評価は一律的なものにはなりえず、個々人の価値観や視点を根拠になされるべきでしょう。

そこでちょっと質問したいのですが、「健康」を求めるといふ指摘がありました。すこしひっかかりました。

○西 健康を求めように故郷を。

○朴 そうですね。しかし、そういう求め方でいいのかということです。それは周知のように障害者を差別させるような、健康概念を基盤にしている言葉ではないかと思います。健康を求めように故郷をといふと、故郷なるものを十全なものイメージさせるわけですが、そうした認識こそがナショナリズムを支えるものでした。富国強兵思想が病人や弱者や障害者を排除し差別してきた近代をわたしたちは経験しているわけですから。そうした言葉に無頓着になるべきではないと思います。故郷を懐かしむことはいいけれど、健康の象徴になると、複雑な欲望が渦巻くことになりかねませんから。

同じ町にいながらポーランド人とユダヤ人が普段から断絶していたという指摘も、とても重要な指摘だと思います。ホロコースト時代におけるポーランドの人たちの沈黙や傍観はつとに指摘されてますが、そういうふうにしてしまうのは、つまり非日常的な瞬間が来たときの人の行動を決めるのは普段の日常の感覚や交流です。だからこそ、普段や日常における交流や理解が重要だと思うのです。

私はヘイトスピーチがひどくなり始めた時に日本語でツイッターを始めましたが、その理由も、普段における言葉、韓国と断交せよなどの何気ない言葉が、非日常的空間におかれた場合、危ないと思ったからでした。この本に即して言えば、これまで多くのひとが関心を持ってきたのは戦争という非日常的空間だったり、悲惨な、極端な状況だったわけですが、そこに注目することはかえって日常的な空間に対する関心を薄めてしまうことになりかねない。

今日韓関係でいっても、例えば、きのう復員兵の息子としての感覚に関してのお話をうかがえたおかげで、やはり軍人やその後裔への注目もまだ足りなかったと思い知らされましたが、戦争の悲惨さのみならず、<日常>的な空間をみつめてこそ<非日常>のことを予想・理解できると思うのです。さっき、普段の感覚や気持ち、たとえば断絶状態などを見るのがどれだけ重要なかを話したのもそうした考えからです。

